

今回は地域の話をしよう。人を侮辱するような単語が世の中にはあふれている。例えば、バカ野郎、犬畜生、アホ、ボケ、カス、チ○カス野郎、ハンカクサイ、ウソつき野郎、キモイ、ウザイ、ムカツク、ダサイ、ダリイ、最低、などなど。四文字熟語だと、愛揚葉兒、惡逆無道、唯々諾々、衣冠禽獸、意志薄弱、一言居士、一班全豹、烏合の衆、有財餓鬼、横行闊歩、屋下家屋、などなど。初めて聞く日本語は相手を罵倒するロシア語、英語よりも、侮辱する言葉は少ない？と書いてあるものもある。

### 農業委員会をなぜいひだす？

ところで農地はアパマン、三井不動産に行つて「あの土地買いま〜す」とはいかない。農地の売買は全国津々浦々およそ1700ある農業委員会の仕事であり、農水省のホームページには「農地等の最適化……」云々と書かれている。私はカン違いしていた。農業委員会は、あの金髪・ブルーアイのマッカーサーのGHQの指令ではなく、太平洋戦争の3年前から存在し、日本文化が染みついた小作農の地位向上を図り、農民の生産意欲を高める意図もあった、らしい。そして、戦後GHQの御旗を利用した農水省の知恵者が

農地解放を策略したとの文章もある。

ではなぜ1938年に農業委員会ができたのか？ 私はこう考える。そのさらに2年前の1936年2月26日に、陸軍青年将校等1500名がクーデターを起こした。大不況により農産物価格の暴落などがあり、農村ではまさしくおしんのような人身売買が行なわれていた。当時の世の中は財閥主体の経済となり、欧米の資本主義からは何世代も遅れた、よく言えば草創期、悪く言えばやったもん勝ちのビジネスモデルの悪用である。その辺りは今やっているNHKの大河ドラマを参照にしていたきたい。農村を良くしたいと考えた農村出身の青年将校はこのクーデターに失敗して処刑され、何も知らされず参加した兵士は大陸の最前線送りとなった。騒ぎが沈静化されたと言つて、世の中が変わるわけではない。そこで彼らの意を汲んだ人達が農業委員会の前身を作った。いかがでしょうか、尊敬する農水省のみなさん。

## 日本は小作人根性に溢れている(7)

Vol.155



宮井 能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョシディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

さて、農業委員会は愛する長沼町の町役場二階にも存在する。私も農地の売買、借地契約、農地から宅地や雑種地への地目変更などなどでお世話になっている中立的な組織である。その農業委員会は、公職選挙法を準用した農業者の選挙で選ばれる農業委員と、推進委員は特別職の地方公務員であると明記されている。長沼町では農地売買等を農

# オレにも 言わせる!

## 北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

業委員会で農地売買を決定する前に下部組織のあっせん組織が売買を決めることができる。農業経営基盤強化促進法ではそのあっせん等により譲渡した場合に、売り手は800万円、つまり160万程度の税金控除が受けられる。

今回、ある農地が売買されることになった。私には声がかからなかった。私が住む27区は1班、2班、3班で構成され、27区のあっせん委員は2班で決めたからと言うが、疑問を感じた。班とは何か。住所なのか、農地を所有しているのか、農地を借りているのか、明文化されていない。私は上記の二つ半に当てはまるが、呼ばれることはなかった。

今回のようなことは初めてではない。5年ほど前にも同様のことがあり、農業委員会に相談に行く翌日、当時のあっせん委員が謝罪に来た。ところが今回の地域のあっせん委員は当時のそんな話は聞いていないと言う。何か勘違いしているようだ。地域で決まれば何でもできると思っ

に沿うものと考えるが、彼らのバックグラウンドがそれを許さないのだろう。さーこれからの進展が楽しみである。

## 麦に効く、魔法の薬

ここからは金儲けの話である。農業では農産物がたくさん取れば採算分岐点から右45度で利益が上がるが、自然の影響力には勝てず右往左往するのが常である。「田や畑に地力があればそんなことはない!」完熟たい肥を投入すれば良い物が取れる!」とのファンタジーは、過去何十年も日本農業新聞の社説のようなものだ。事実、畜産と畑作を両方やっている生産者の農産物が一番だ!という話は100km以内には存在しない(150kmには存在する)。

100%の麦生産者に言えることだが、初めて麦を栽培し収穫した物を100%とすると、翌年も麦栽培をする連作だと初年の90%の収量と90%の製品率、つまり収益は81%になりこれが採算分岐点になる。3年目も麦を栽培すると初年度の80%の収量、製品率、つまり64%の収益になる。これでは3年目の麦作は赤字になる。そこで大豆などを取り入れて連作障害を回避する。

ところが麦の連作も5年以上と続けていると収量が上がってくるよう

だ。化学的には嫌気性細菌と好気性細菌のバランスが...となるそう。これは論文もあるし、ビートにも当てはまり、多くの地域で実証されているのだから間違いない農法と言えらるだろう。

ただし、先ほども述べたとおり連作の3年目、4年目は収益で地獄を見る。30年前であれば、麦の収量や収益が今よりも良くないときは連作をできても減益は我慢できたのである。私も恐ろしい計算をしてみた。麦の連作を4年続けたら億近い減益になる。10年スパンで見ればこの麦連作にメリットがあるが、どうぞ皆さんもやってください、とは言えない。世の中には捨てる神もいれば拾う神もいるのだ。イヤ、神ではないな、競争社会を通して豊かな社会を目指す資本主義があるからだ。小作人根性のみなさんや自民党支持の共産党のみなさんには理解できないでしょうね。

そこに登場するのはチチンブイブイ、魔法の薬だ。例えば特許の申請書にも書かれている。理由は分からないが穂発芽防止する。亜リン酸肥料は、この地域では標準装備になる。麦の連作障害防止には、一昨年から魔法の薬を使っている。有名どころではキセキで販売している納豆菌のコストは約2万6000円/ha

で、散布したところは縞萎縮症状が出ないが、散布しない・半量散布だと大変なことになる。いろいろな勉強会を通して、いろいろな魔法の薬の情報を得た。

ある魔法の薬を散布すると、マース晴らしい効果を得た。肥料は20%少なく、収量は20%アップになった。コストは納豆菌の数分の1になる。この魔法の薬は先ほどの納豆菌と同じで、土に散布するもので作物に散布しても無駄だ。私は秋小麦に、春雪解け時のトレファノサイドと混用し、春小麦にはムギレンジャーと混用して成果を出している。ただ、土壌分析をして処方箋どおりに肥料管理していない、次の世代に数字で相続できない農家は論外である。

連絡先を記載する。そんな儲かる物を教えていいのかだつて? 富の独り占めをできると考えるのは小作人根性の持ち主である。農業を産業と考えた場合、全体の底上げがなければ富の分散はできないのだ。騙されていると思えばやらなければそれもよし。ただし、何もやらなければ、昨年と同じ飯を食うことになる。信じ

るか信じないかはあなた次第!!

担当 うますめ 090-25221-0918  
担当 なんぶ 090-36229-0749  
①ショートメールでご連絡ください